人物で語る日本デンマーク

⑲ 松林了観

松林了観は、福釜西岸寺第十四世住職である。了観が十二歳の時、父了響は他界した。そのため家計は苦しかったが、岡崎の小教校で中等程度の教育を受けた。その後、京都本山の上等教校を卒業し、一八八八年（明治二一年）二十八歳の時に福釜に帰ってきた。青年の姿や農村の状況を目の当たりにした了観は、青少年の教育と農村振興に尽くすことを決意し、住民の理解と協力を得て、実行に移していった。ここでは福釜報恩社と青藍学校について述べる。

報恩社は、了観の働きかけと地域有力者や住民の理解によって、一九〇七年（明治四〇年）十月に新田、本郷、五十石に設立された。了観は、社則をつくり、自ら相談役になって指導的な役割を果たした。

設立の目的は、農家の道徳を増進し、農家の実務を策励し、農家の家庭を円満にし、もって天恩、国恩、先祖恩、父母恩、仏恩などを報ぜんとすることであった。

毎月一回の集会は、まず貯金の取りまとめをし、その後、了観所蔵の二宮尊徳の肖像画を拝み、報徳訓や二宮翁夜話を唱えてから始められた。

集会の内容は、報告・協議・講話・懇談などであった。また、三か所の報恩社が合同で総会を開き、講演会・善行者の表彰・敬老講話会などを行った。講演会には、親交のあった山崎延吉などを招き、農家経済・農業経営・信用組合設立の必要性などについて指導を受けた。

報恩社の活動は一年余りであったが、農民の意識も変わり、福釜信用組合が設立されることとなった。了観は、理事として信用組合の基礎づくりに尽力した。

了観は、農村の改善や振興を図るには青少年の教育が必要であるとの信念から、一八八九年（明治二二年）四月に青藍学校（青藍夜学舎）を設立した。その目的は、次代を担う農村青年としての自覚を持たせ、必要な資質を修得させることであった。初めは、西岸寺本堂において数人の青年に指導を試みた。二年後に福釜在住の十五歳から十八歳ぐらいまでの青年を集めて本格的に指導を始めた。校舎は、一八九三年（明治二六年）に住民の奉仕や援助で敷地内に移築された。

学科は、修身・国語・漢文・作文・理科などを中心に、時には手芸・習字を指導した。教科書は、小学修身訓・中等修身書・中等漢文・報徳教の精神・尋常高等小学読本・日本立志編など十八冊ほどで、学校は農閑期の隔晩二時間ほどであった。

了観の指導はかなり厳しく、時には大声で叱りつけることもあったという。また、了観は、生徒に勤労や節約を勧め、毎月貯金をさせた。

青藍学校は、一九一八年（大正七年）に安城町立実業補修学校が設立されたために閉校した。この間、この学校で学んだ生徒は、福釜内外で二七〇人ほどに達した。

了観は、そのほか青藍幼稚園の設立、新聞雑誌縦覧所の設置、農繁期託児所の開設なども行った。

了観は、一九三二年（昭和七年）二月に七十一歳で病死した。翌年四月に了観夫妻の遺徳をしのんで境内に銅像（今は石像）が建立され、了観の業績は、後世に語り継がれている。

文　稲垣維晁

松林了観とその妻の像
（西岸寺境内／福釜町）